ともしび
共生委員会ニュース

2015 年度　4 号

2015 年 11 月 26 日版

共生・校外学習委員会は平和や共生に関わる活動、修学旅行などを担当する教員の委員会です。原爆投下の地、長崎を訪れる 2 年生の修学旅行だけでなく、高等部の 3 年間の生活を通じ、同じ社会に共に暮らす様々な人々との関わりに目を向け、平和や共生の問題を考えていきましょう。この共生委員会ニュースでは、様々な経験をする機会を得た生徒や教員の声も他の多くの皆さんへ届けたいと思っています。その経験を共有し、一緒に考えるきっかけとして下さい。

THINKING ABOUT REFUGEES

Sam Berry（英語科）

In the summer holiday I went back to my hometown Sheffield in the UK. I had a great time meeting my friends and family, eating British food, enjoying the weather (Tokyo is too hot for me!), and reading British newspapers. The biggest story in the newspapers was about refugees and migrants. Many refugees were trying to escape the war in Syria and come to safer countries in Europe. Many of them wanted to come to the UK.

Some people in my country were worried about the refugees coming, and many newspapers published negative articles about refugees. Some newspapers wrote about a migrant "invasion", and some suggested that we should use gunships to stop the refugees from coming. The Prime Minister, David Cameron, said there was a "swarm of migrants". Some people protested on the streets and said that the UK is full, that there is no space for refugees.

Then, something sad happened. Aylan Kurdi, a 3-year-old Syrian boy, died when his family were trying to cross the sea to get to Europe. A photograph was taken of Aylan's body on the beach. It was a sad, shocking and very powerful photograph, and it caused a strong public reaction all over Europe. Many people went to the streets with signs saying "refugees welcome". Football supporters also held signs. Ordinary people met refugees and gave them food, water, clothes, and toys for their children. When some refugees arrived in Germany after a long and dangerous journey, ordinary Germans clapped and cheered and welcomed them. When I try to imagine how those refugees must have felt when they arrived in Germany - tired, worried, excited, afraid - I thought it was an amazing and beautiful thing that ordinary people greeted them so warmly. I hope I can be a person as kind and welcoming as them.

The photo of Aylan and the public reaction also forced the government to change its refugee policy. David Cameron said the UK will accept 20,000 Syrian refugees by 2020. Compared to Germany, which has accepted around 800,000 refugees in 2015, it's not so many, but it's much better than talking about a "swarm" of refugees.

However, of course, it's a complicated problem, and no-one knows the best solution. On a human level, though, I think there are two things we can do. First, when somebody asks us for help, if we can, we should try to help them. I want to be a person like the Germans who brought food for refugees, or who cheered and welcomed to their country. Second, when we talk about refugees, or read about them, I hope we can remember that they are not a number or a word in the newspaper, they are people just like you and me, and they want a safer and better life, just like you and me.）

Useful Vocabulary

refugee – 難民
migrant – 移民
publish – 出版する
article – 記事
invasion – 侵略
swarm – 群れ
public reaction – 世間の反応
ordinary people – 一般市民
policy – 政策
compared to - ～と比べて
complicated – 複雑

スカベンジャー

64 期　HR304　N.H.

皆さんにとって日常とは何ですか？



私はこの夏休み、SYD 主催の全国青年ボランティア・アクション in 福島という 6 日間のプログラムに参加し、石巻市の仮設住宅での炊き出しや、喜多方市の老人ホームでお手伝いをしました。また、5 日目の夜には同団体が行っているフィリピン訪問プログラムについての講演を聞きました。特にスカベンジャーのお話はとても衝撃的で、自分たちの生活について考えさせられることが多くありました。

スカベンジャーとはゴミ山の上に違法に暮らしている人たちのことです。フィリピン国内だけでなく日本を含む海外から運ばれてきたゴミの中から、ビニールや貴金属などお金になりそうなものを拾って生計を立てています。スカベンジャーの多くは私たちよりも年下の子どもたちで、食事は 3 日に 1 度ほど、着る服も履く靴もない状態です。

映像に映る子どもたちは常に笑顔で、カメラに向かってピースをしていました。しかし彼らは絶対に日本から来た人たちに近づこうとはせず、理由を尋ねたスタッフに「自分たちの匂いがうつってしまうから」と答えました。もし私が同じ状況だったら、「疲れた」「お腹がすいた」などと文句を言い、スカベンジャーの子どもたちのように異国から来た人たちに対して優しい気持ちで接することは出来ないと思います。



私はこの映像を見てから“優しさ”とは何かが分からなくなりました。自分が満たされていて余裕があるから優しい気持ちを持とうと思えるのではないか・・・それは本当の意味の優しさではないのではないか・・・そしてもう一つ気付かされたことは、私たちにとっての「当たり前」は全く「当たり前」ではないということ。毎日食事に困らず、学校に通えることが恵まれていると分かっている人は多いと思います。しかしそれ以前に毎日お風呂に入ったり、着る服があって履く靴がある、そしてそれを毎日選ぶことができるなど、私たちにとっては当たり前すぎて気にも留めなかった“日常”が実はすごく恵まれていることなのです。



「あなたの夢は何？」というスカベンジャーへの質問に対し、ほとんどの子どもたちは「学校に行くこと」「お腹が一杯になるまで食べること」と答えていました。同じ世界に住んでいるのに環境が違うだけで私たちの“日常”は“夢”へと変化してしまうのです。私はこれまで途上国の現状について理解している気でいました。しかし、実際は分かっているどころか、想像すらできなかった生活がありました。途上国の実態だけでなく、私たちの日常についても私はなにも知らなかったのです。ただ一つ分かったのは、毎日繰り返される一つ一つがとても恵まれていて“日常”という一言では片付けられないことです。私たちは先進国の「当たり前」がとても幸せであることと、その裏側で貧困に苦しむ多くの人の存在を決して忘れてはいけないと思います。

館山海軍航空隊と青山学院水泳部合宿所

佐藤　隆一（地歴公民科）

以下は、2015 年 9 月 6 日（日）に館山市コミュミティセンターで開かれた、第 19 回戦争遺跡保存全国シンポジウムで、私が報告した内容の要約です。

関東大震災直後の 1926 年（大正 15）に青山学院は、房総半島南端の館山湾に面した高台の上に水泳部の合宿所を建設しました。これは、敷地 1,500 坪で、合宿室 80 畳、職員室 8 畳、予備室 6 畳、食堂、炊事室、炊事人居住室などを備えた、館山湾を眺望できる木造平屋建ての合宿所でした。この合宿所で毎年水泳合宿を行ったのは旧制中学部（男子系）の生徒たちと教職員で、水泳選手だけでなく一般の生徒も多数参加して、ふつうは 2 期に分けて、1 期 10 日間の日程で行われました。館山の海は遠浅で水温も温かいので、泳ぎを知らなかった生徒も帰る頃にはしっかりと泳げるようになりました。食事はご飯と野菜の他は地元の海で取れる魚が豊富に出されるので、皆美味しくいただいたと言われています。また、合宿中は「おとぎ会」と称する、生徒たちが地元の大勢の人たちを集めて歌・楽器演奏・劇・落語・映画上映と解説などを披露する学芸会を開いて交流を深め、楽しいひと時を持ちました。



さて、1930 年（昭和 5）に合宿所の前の海が埋め立てられて、館山海軍航空隊の基地と飛行場がつくられましたが、青山学院は以後も水泳場を移動することで、水泳合宿を続けました。しかし、1941 年（昭和 16）9 月に海軍は青山学院に水泳部合宿所の譲渡を強く迫り、青山学院は売却にふみきりました。これまで、『青山学報』などの機関紙は譲渡の時期を 1941 年 12 月、すなわちアジア・太平洋戦争開戦の時期と記していましたが、最近になって、当時の学院長のご子息である駒場エデン教会牧師の笹森建美先生が秘蔵の史料を公開してくださった結果、譲渡は 3 か月も早い同年 9 月で、しかも海軍側が秘密裏に譲渡を行うように指示をしていたことがわかりました。その結果、水泳部合宿所譲渡に関わる史料は青山学院には残らず、笹森家が個人的に長い間所蔵することになりました。一方、合宿所の譲渡の背景には現在も残る赤山地下壕とよばれる海軍の地下要塞の建設が、水泳部合宿所の近くまで進んでいたことがあったようです。従来、赤山地下壕の建設は敗戦間近の 1944 年（昭和 19）から始められたと言われてきましたが、青山学院水泳部合宿所譲渡の事実により、赤山地下壕の建設は開戦直前の時期にはかなり進んでいた可能性が高くなりました。



館山の豊かな自然と地元住民との温かい交流のなかでつちかわれてきた青山学院の水泳合宿も、戦争推進の国策によりあえなくその終わりを迎えました。戦争はこんなささやかな学生生活の一部にも影を落としていたんですね。

65 期生は修学旅行に向けて、夏休みに「九州」「平和」「キリスト教」などをテーマとした８題の課題から一つを選んで取り組みました。修学旅行から帰ってきた今、これまでの LogBook の学習を基礎に平和の担い手となるための論文の執筆を行います。

課題１．身近な方の戦争体験に関する取材を行って、その内容をまとめなさい。

祖父の戦争体験

ＨＲ204　S.M.

今回私は、戦前に生まれ戦争を経験した祖父に戦争がもたらした生活環境の変化について聞いた。祖父は、中学から青山学院に通っていて、また戦争が始まったのは中学一年生の終わりであった。学校が生活の中心になりはじめた時期に戦争を経験した祖父は、戦争が始まる前から生活環境は変化していたと言っていた。初めに変化したものは、食生活だ。中学一年生の二学期ころから給食はおかず以外出てこなくなり、三学期には給食がなくなってしまったそうだ。また、中学一年生の時には授業も大きく変わってしまった。二学期には外国人の英語の先生が自分の国に帰ってしまったため、英語の授業は日本人の先生が担当した。「軍事教練」という授業が新しく増え、おもちゃの銃を使って戦争を身近なものに感じたり、毎朝明治神宮まで走る「早朝訓練」というものもできた。三学期ころからは生徒のほとんどが「勤労動員」といって、学校に行かず様々な工場で働くようになった。祖父もまた戦争の武器をつくる会社で働いた。当時は幼かったため、恐怖心よりも大きな工場を見た興奮や遊び半分な気持ちが強かったと祖父は言っていた。このようにして、戦争を身近に感じる機会が増えた結果、戦争は日本が勝つものだ、という意識がたくさんの人々に植え付けられていった。

中学二年生になると身の周りの環境が変化していった。祖父の住んでいた地域は、武器をつくる工場の拡張や空襲で炎が燃え広がらないようにするため、家が次々に壊されていった。そして、祖父は仕事で東京に残る父を家において、他の家族全員で栃木県の真岡というところに疎開した。疎開先でも東京と同様に「学校工場」というものがあり、勉強をせずに戦闘機の胴体を作ったりしていた。祖父の疎開先は田舎で、学校に行くときはいつも機関車を使っていた。疎開していた祖父は空襲にあうことはなかったが、東京大空襲の時には疎開先の栃木からも東京の方が炎で赤く染まっているのが分かったという。

戦争が終わり、東京に帰ると強制撤去されなかった自宅は奇跡的に空襲の被害にあわなかったものの、近所は焼け野原になっていた。祖父の住んでいる地域では空襲の被害にあわなかった家は珍しかったため、自宅を近所の人に貸したりし、自分の家があった場所に焼け残りの木材やトタンで家を建て生活している人もいた。

東京に戻ってきてから変化したのは居住環境だけでなく、食生活も変化した。米は生産量が少なく物流がないため、なかなか手に入らず配給制度で米をもらっていた。他にも家庭食堂（現在のレストラン）も配給されるチケットがなければ行けなかった。配給だけでは食糧は足りなかったため、農家まで遠出をして食糧を買い出したりした。しかしそれはやってはいけないことなので、警察などに見つかったら没収されてしまうこともあった。そして、中学に復帰できたのは中学三年生の二学期であった。校舎は鉄筋のみのこり他は丸焼けだったため、木材でつくった簡易的な校舎で授業を行ったが、暖房設備がなかったためコートを着たり手袋をつけて授業を受けた。大変な環境だったのにも関わらず、中学一年生の終わりから中学三年生の二学期までほとんど勉強できなかったため、勉強できることが嬉しかった、と祖父は言っていた。また、勉強だけでなく、大学生になると代々木にあるアメリカ軍の住宅であるワシントンハイツで英語の勉強も兼ねてベビーシッターとして働いた。この話から分かるように、日本とアメリカの関係は国際的に見ると悪かったように思えるが、地域的な人々との関わりは緊迫したものではなかった。

祖父に話を聞いて、自分が今いかに恵まれた環境にいるかを実感した。毎日ちゃんと食事ができること、学校で授業を受けられること、帰る家があること、様々なことに感謝していきたいと思った。また、祖父が生きるためにたくさんの物事をやってきたように、自分もすべてのことを一所懸命に行いたいと思った。そして、多くの人の人生を変えてきた戦争というものの恐ろしさを知り、自分には何ができるのか分からないが、戦争というものが自分に近づいてきているこの環境を忘れずに、戦争は二度と繰り返してはいけないということを心にとめ、生きていきたい。